

ベッドに入ってきたヤマトの上に乗っかるように身体を重ねた。胴体はすっかりくつつけて、足はヤマトの足を挟むように外側に投げだす。

「重くない？」

「ちようどいいな」

「何それ。変なの」

重いか軽いと答えるならまだしもちようどいいはないだろう。自分は細いとはいえそれなりの体重はあるし、こんなふうに乗っかられた体勢がびったりはまるなんて普通は思わない。

「変か？」

「変だよ」

けれどヤマトとこうやって密着して話すのはとても心地良かった。

「ヤマトさ、ちゃんと頭乾かしてから寝ないから後ろのところ毎朝跳ねちゃうんだよ」

指で髪を梳くとほんの少しだけ湿り気が残っている。

癖毛は徹底的に乾かさないと翌朝危険だと知っている春海はいつもヤマトにそう言うのだが改まらない。

硬い感触の髪に触りながら寄せた頬もいつもより温かい。風呂上がりのヤマトにくつつくのが好きな春海は、ヤマトがそれを知っているから髪を乾かすのおおざなりな急いでベッドへやって来るのだとは知らなかった。

鼓動が聞こえそうならい近くに胸と胸を寄せたまま唇を合わせた。身じろぐと身体のだこかしらが擦れるぐらいいだからヤマトの動きもよく解るし、自分の体温もきつとあまさず伝わっている。

ほう、と小さなため息を零した。

「眠いのか？」

「ん？ きもちいいよ」

答えてヤマトに身体を擦りつける。

(心臓の音、どきどきする)

重なった胸から響く鼓動が内側から身体を熱くする。

もつともつと押しつけた。

「なるほどな」

「何？」

「お前は気分屋だが、最近読めるようになってきた」

「んっ……何、が？」

答えの代わりにヤマトが背中に腕を回してきた。すり寄せていた頬にキスをされて唇に返す。互いの唇を軽く何度か食みあう。

(気分屋、って思われてるのか)

くすぐったいような少し淋しいような感想を抱いた。

確かに自分は雰囲気とノリで物事を決めるようなふしはあるが、こうやってヤマトとしている事に関しては自分一人の気分なんかでは決してない。というか春海には

まだまだ気分でヤマトをあしらうような余裕がなかった。

新世界を創造してすぐにつきあいだしたのはなりゆきだがどちらかといえどヤマトのほうが強引だった。抱きあうのを拒む時だってはつきりと嫌だと言うよりは、これはそういう場面なのかなと迷っているうちにヤマトがすつと引くというパターンが多い。

多分互いにまだまだ相手を探りあう段階なのだろう。

余裕のないのを見透かされるよりは気分屋の解りにくい奴だと思われていたい。だからもつと知ってほしい気持ちには隠して、ヤマトの誤解を否定しない。

(俺、結構面倒くさいヤツだったんだな)

苦笑を浮かべてキスをしたらヤマトもむっとした表情を見せる。

「年上ぶるな」

「ぶつてないよ。ねえ、機嫌直せつてば」

春海の言い方にますますへの字になった唇にもう一度キスを落として今度はゆつくりと微笑んだ。ヤマトが好きな笑い方はもう覚えていて。気にいらぬが許す、と彼の表情が語っていた。

背中に回された手がTシャツの中に入りこむ。小さな息を漏らしてヤマトの喉の辺りに顔を伏せた。昼間に目立つ場所には痕をつけないように慎重に唇で触れながら胸を強く擦りつける。すつかり速くなった自分の鼓動の

せいでヤマトがどんなふうに感じているのかは解らなかった。

体温とは別に身体を中から熱くするものを求めて春海の動きは激しくなる。二人ともまだ着たままだが、胸の突起はそれで余計に擦れて疼いた。刺激に硬くぷつくりと膨れれば余計にそこで感じてしまう。膝を立て、腰を浮かせて上半身を擦り寄せ続けるうちに、ヤマトの手も背中から胸側へと移動してきた。

「お前はこの辺りは平気だったか？」

「ヤマト、ちよつと……」

わざと感じているより少し下、へその辺りばかり撫でまわす手に彼は身を振る。手が邪魔で乳首を擦りつけるのも捗らない。くすぐったくてもどかしい手を止めようと片腕を上げたが、先に広げた足の間に刺激を感じた弾みで体勢を崩した。

「つ……」

顎からぶつかる、と思った矢先に肩を押さえられ、そのままゆつくりと抱きとめられた。

「びつくりするだろ！」

どうやら股間をヤマトの膝でつつかれたようだ。

「フツ、ようやくおとなしくなった」

「もうっ。いつもそんなんだから」

抗議する春海の顔には苦笑が浮かんでいた。ヤマトは